

日本統計学会会報

NO.110/2002.1.20

発行——日本統計学会
東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-8569 Tel 03-3442-5801 Fax 03-3442-5924
編集責任—小西貞則(理事長)/土屋隆裕(庶務理事)
瀬尾 隆(広報理事)/山口和範(広報理事)
振替口座—00190-2-61361
銀行口座—第一勧業銀行広尾支店普通1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 巻頭随筆：「統計科学とデータ解析雑感」佐藤義治... 1	8.1 第70回大会のお知らせ 9
2. 「第7回日本統計学会賞」受賞候補者の推薦募集 3	8.2 第70回大会へのお誘い広津千尋他...10
3. シリーズ：「統計学教育にパソコン演習を」縄田和満... 4	8.3 第70回大会共通テーマについて...岩崎学他...10
4. 海外研修記本田敏雄... 6	9. 統計教育委員会報告村上征勝...13
5. 韓国統計学会30周年記念大会に出席して杉山高一... 7	10. 研究部会活動最終報告 13
6. 科学研究費「統計科学」について ...竹村彰通... 8	10.1 「環境データの解析」活動報告書 13
7. 会則改正について矢島美寛... 9	10.2 「データマイニングにおける統計的手法と実際」 活動報告書 14
8. 第70回大会のお知らせ 9	11. 2000・2001年度第5回理事会議事録 14
	12. 日本学術会議報告吉村 功...16
	13. 会合案内 17
	14. 事務局から 17

巻頭随筆

1 統計科学とデータ解析雑感

佐藤 義治 (北海道大学大学院工学研究科)

現在複合領域の一つの分科として「統計科学」がありますが、平成15年度から「統計科学」は総合領域の細目の一つとなるようです。科学研究費の競争原理は申請数ですので、申請数が少ないことが決定的であると考えられますが、一方では「統計科学」の専門領域のあり方にも問題があったように思われます。最も重要な要因は大学において「統計科学」の専門分野で学位が出せなかったことです（現在は総合研究大学院大学に唯一の統計科学専攻があります）。我々の講座は現在、工学研究科のシステム情報工学専攻（以前は情報工学専攻）に属しています。ここで、「統計科学」に関する学位を出そうとすると、以前は学位授与審議委員会等で「.. お話はよく分かりましたが、なぜこの論文が「情報」なのか」という質問がありました。これに対して我々は、「統計科学」は「情報科学」や「情報学」において、データから

有効な情報や知識を抽出する方法論、あるいはその確からしさを検証する方法を論ずる学問であり、情報学における重要な分野である、ということをおぼろげを得ない状況でした。これは数学や経済学の分野でも状況は変わらないと思います。「数学専攻」としての学位を出すときには「統計科学」ではなく数学であるという説明をしなければなりませんし、「経済学専攻」でも同様と考えられます。つまり、「統計科学」という専門分野は単独では存在しないこととなります。しかし、最近では「情報学」のプロパーな専門家の中でも、特にデータベースの専門家にとってはデータ解析の重要性が認識され、以前のような質問はありませんが、これは必ずしも「統計科学」分野の努力ではなく、データベースからの知識発見やデータマイニングの登場によるものです。その意味において、「統計科学」が「情報学」の一分野ということになれ

ば、確かに学位を「情報学」として出すことに問題がなくなるという皮肉な状況にあります。

また最近、情報の取得・蓄積の技術の進歩により様々なデータベース（単にデータが蓄積されているものも含む）が開発されている。蓄積されたデータから将来の決定や行動に対して何らかの知識や情報を得たいと考えることは当然のことであろう。前述のデータベースからの知識発見やデータマイニングはまさにこの発想である。データマイニングに関する研究は主に情報学の分野で盛んに発表されており、その内容が我々の耳にも届いているところだ。従来から統計学の方法を応用した研究は、たとえば生物・医学さらには経済学、工学等様々な分野に応用された研究などがそれぞれの学会で発表されているのは周知の通りです。統計学に関連する学会で発表されないのは当然のことです。これらはあくまでも専門分野の研究であり、統計学の研究ではないということです。それらの多くは統計学の立場から考えても理解できる、すなわち、従来の統計学の枠組みとそれ程違いはなかったように思われます。一方、データ解析の分野においては、データマイニングの登場は多少様子が異なりました。データ解析が統計学か否かという問題はあるにしても、わが国ではデータ解析が統計学と密接な関連のもとに発展してきた経緯から、統計学の立場で論ずることといたしますと、データマイニングが登場した背景には、統計学の理論と現実の要求との間のギャップがあるように思われます。そのギャップにはつぎの二通りがあります。その一つは、知識としてのギャップであり、他の一つは理論の仮定と現実の要求とのギャップです。

第一のギャップの意味は、多変量解析をはじめとする多次元データ解析の理論は厳密さ、精緻さを追及することにより難解さを増してきていることです。これは当然のことであり、極めて重要なことですが、専門外の方にはデータからこんな難解なことを知りたいのではなくもっと単純な結論が欲しいのだということです。これは最近特に感じる事ですが、理論の意味や応用の方法を理解す

るためにはそれなりの努力が必要であるにもかかわらず、理解できないことは役に立たないという風潮があるように思われます。これにはわが国における統計教育の問題も含まれると思われます。現状では、大学の教養課程で統計学を履修するのが大部分と思われませんが、ご承知の通り教養課程で可能な統計学の範囲は極めて制限されます。統計学は一種の応用科学ですので、基礎的な数学の知識の上で議論されています。したがって、教養課程を終えた後の専門課程で教育しなければ理解できない部分が多いように思われます。

第二のギャップは、勿論上記に関連はしますが、理論を適用するには仮定が多すぎることです。現実にはそのような仮定を満たすデータは存在しない、したがってそのような理論を利用できない、というものです。特にデータマイニングの基本的な考え方は、観測データにあらかじめ何らかの仮定をおかずに分析する方法を開発することである、というものです。これには素直に耳を傾けなければならない部分と、それだけでは、得られる情報（知識）に自ずと制限があるし、また得られた情報の確からしさになら保証が得られないという部分があります。まず、様々なデータ解析のモデルに関する仮定ですが、無闇に仮定を批判することは意味がない、例えば線形回帰理論における正規残差の仮定は誤差理論からしてもまたエントロピーの立場にしても無理のない仮定であります。この立場から導かれる様々な結論は応用上でも重要であることは言うまでもありません。しかし、現実には誤差がすべて独立で等分散という仮定は確かに無理があるように思われますので、所謂ヘテロジニアスな誤差に関する理論があることを知らせ、さらには具体的な応用法を展開する必要があります。また、分散分析や判別分析等における分布に関する制限などがいかにも現実離れしたことのよう誤解されている。これらが、データマイニングにおける決定木や回帰木等の方法に結びついております。勿論、これらの制約を緩和した理論の構築を目指すことは重要ですが、全く制約のない理論はあり得ません。適当

な仮定の下で理論的に言えることの重要性が正しく理解されていないように思われます。私共はよく、理論の仮定を正しく理解した上で、必ずしも仮定を満たすとは思われないデータに対しても自由にモデル（理論）を当てはめてみなさい、というっております。仮定を満たす場合には、何をどこまで、どの程度の確からしさでものが言えるのか、という目安が重要であると思われます。もしそれがなければ、単に思いつきを言っているにすぎない、というのは極端にしても、ものを言う場合の

根拠が薄弱になります。データマイニングにおいても得られたデータを単に解析するだけではなく、そこから得られた知識を将来の意思決定に役立てることが主要な目的であろうから、何ら仮定のないところで将来の予測をしようということには、かなり無理があるように思われます。したがって、データ解析の分野においては、できる限り手法の制約条件を緩和する努力をしなければならないが、一方では、統計理論を正しく理解することの重要性を広く認識させる努力をしなければなりません。

2 「第7回日本統計学会賞」受賞候補者の推薦募集

第7回日本統計学会賞受賞候補者の推薦募集を下記の方法にしたがって行います。書式については、学会事務局にお問い合わせください。第7回受賞候補者の推薦締め切りは2002年5月30日です。推薦書の宛先は学会事務局です。

【推薦方法】受賞対象者の選考は、会員の推薦を受けて、選考委員会が実施する。

- 1) 受賞の候補者を推薦することができる者は、日本統計学会の正会員、名誉会員に限る。推薦者は所定の書式にしたがって、対象範囲に定められた分野のいずれかに候補者を推薦する。

なお、賞の概要を以下にご紹介します。

【名称】日本統計学会賞

【趣旨】統計学の研究及び普及に対して貢献した個人に対して授与し、その功績を顕彰する。

【対象範囲】受賞の対象となる者は、その年齢、性別、国籍、日本統計学会の会員・非会員の別を問わない。また、対象とする分野は次のとおりとし、全体として年間3名程度に授与する。

■理論：統計学の理論の発展に多大な貢献のあった者。

■実証・応用・計算：この分野は以下のような内容を含む。

- (1) 人文・社会系では、経済、経営の実証分析、社会学、言語学、心理学の調査・分析など、統計的手法を利用して社会的現象を解明す

るのに貢献のあった者。

- (2) 医学、工学、農学、理学などでは統計的手法の適用による具体的な問題の解決に対する貢献のあった者。
- (3) 統計計算では、統計的分析のためのアルゴリズム・ソフトウェアの開発に貢献のあった者。
- (4) 応用一般として、分野を問わず統計調査の標本設計、経営管理などで貢献のあった者。

■その他：理論・実証・応用などを含め、幅広く統計学の普及・発展に貢献した者。

【選考方法】受賞対象者の選考は、会員の推薦を受けて、選考委員会が実施する。

- 1) 略（上記推薦方法1）を参照）
- 2) 選考委員の任期を1年とし、その委員会の構成は以下の通りとする。

日本統計学会会長、前会長、理事長、会誌編集担当理事2名、および会長が推薦し評議員会が承認した者若干名。

選考委員会委員長は、日本統計学会会長が務める。

【賞の内容】賞状および記念品などの副賞を授与する。副賞は、原則として「統計学の学会活動60周年記念基金」の果実の範囲とする。

【発表】選考委員会は、その結果を評議員会および学会総会において報告し、大会期間中に授賞式を行う。

3 統計学教育にパソコン演習を

縄田 和満（東京大学大学院工学系研究科）

1. はじめに

9月の福岡での学会で、広報担当理事の瀬尾さんから、学会広報誌への原稿の依頼を受けた。内容は自由とのことであったが、数年前に（私自身が）広報担当理事だったときに、広報誌に「今後の統計教育」というシリーズを担当していたことを思い出した。今回は統計学教育、特に、統計学を専門としない学生に対する入門的な教育に関して、私自身の存念および経験を述べさせていただく。

統計学教育は、数年前に比較してもその重要性は、より重要性を増していると考えられている。しかしながら、一方では、学会でも統計学教育の危機が言われている。これは、なぜであろうか。需要と供給のミスマッチではないかと思われ、我々統計学を専門とする者も反省する必要があるのではないだろうか。統計学を履修する学生のうち、ほとんどの者は将来統計学を専門としない。しかしながら、専門分野を問わず、データの解析・整理を必要としない学生はいない。これまでの統計教育は理論偏重であって、実際にデータを扱い、適切な分析を行うための教育が不十分であったのではないだろうか。誤解を恐れずにあえて言えば、多くの学生にとって、実際にデータから平均、分散、相関係数などを計算できることの方が、統計学の理論の正確な理解よりも重要であろう。

学生実験・調査等を行わない大学はないが、その結果、得られる数十程度の大きさのデータでも、分散や相関係数を電卓で計算するとなると結構大変である。このような経験をする、学生は、統計学は面倒なだけで面白くないと感じ、統計学嫌いになってしまうことになる。（初歩的な理解のため、ごく簡単な問題を演習として解かせる以外に）電卓を使って学生に分散や相関係数を計算さ

せることは（学生に難行苦行を強い、統計学を嫌いにさせるだけで）ほとんど意味のないことであろう。このためには、統計学の講義には、パソコンを使った演習を必ず加え、学生が実際に答えをだせるようにすることが必要であると考え。特に、入門的な講義ではその必要性が高く、少なくとも数回程度のパソコンによる演習は行うべきであろう。当然、統計の理論的な説明は少なくなるが、演習を行うことによる利益の方がはるかに大きいと考えている。一部の大学では、積極的に演習が取り入れられているが、教員の個人的な努力によるところが大きいのが現状であろう。

2. パソコン演習の実例

具体的にどのような演習を行うべきかであるか、私の経験を述べさせていただく。私は勤務する東京大学で教養学部の1、2年を対象とした「基礎統計」という統計学の入門科目を10年以上に渡り担当している。対象とする学生は、文科・理科を問わずすべての科別の学生である。受講者は例年200-300名で、6割が理科学部、4割が文科学部となっている。「基礎統計」は1学期の科目で合計13回の講義を行うが、そのうち、5-6回をパソコンによる演習に当てている。

使用するソフトは、Microsoft社のExcelである。改めて述べるまでもなく、Excelは世界的に最も広く使われているプログラムの1つで、i) 取り扱いが簡単なこと、ii) 統計分析以外の分野にも広く使われており応用範囲が広く、パソコンの利用方法の入門としても有益であること、iii) 実際の操作を確認しながら演習を行うことができるので、統計手法や理論の理解の手助けとなること（SAS、SPSS、TSPなどの統計分析専用のパッケージ・プログラムでは手法や理論について何も知らなくとも結果を得ることができてしまう）、な

ど統計学の入門者にとって利益が大きいと考えられる。

演習内容としては、まず、Excelの使用方法について説明する。ここでは、Excelの基本操作、表計算機能、グラフの作成、データの並べ替え、条件にあったデータの抽出などを行う。次に、数十程度の比較的小さな演習用データを使い、1次元のデータの整理として、度数分布表およびヒストグラムの作成、平均・分散・中央値などの計算を行う。2次元のデータの整理としては、散布図や分割表の作成、相関係数の計算などを行う。さらに、区間推定・仮説検定の演習を行い、これらの演習を通して推定と検定の基本的概念を理解させる。最後に、実用的で応用範囲が広い分野として、2標本問題、適合度の検定、相関係数を使った検定、一元配置分散分析などを行っている。(本来は、回帰分析まで含めたいのであるが、1学期の講義では無理があるようである。)このような内容は、統計学ばかりでなく情報処理やパソコンの利用の入門としても価値があるであろう。(具体的にどのようなことを行っているかに関して興味のある方は、拙著「Excelによる統計入門(第2版)」朝倉書店を参照していただきたい。)

3. コンピュータ設備

演習を行うにあたって、東京大学教養学部には200名収容のコンピュータ演習室がありそれを使っている。また、演習時には3名の大学院生のティーチング・アシスタントを使っている。年によっては、200名の収容人数を越える受講生があるが、その場合は(昼休み前の2時限に行われる講義なので)昼休みを使いクラスを2つに分けて演習を行っている。個人的な意見として、大学での統計の生き残りのためには、この程度の負担増は致し方ないであろうと思う。

東京大学教養学部のように大規模なコンピュータ演習室を持つ大学は少ないが、コンピュータの十分な設備がないというのは、言い訳にならない

であろう。2,000台の端末を数十台のサーバーで処理する東京大学のシステムが好例であるが、大学のコンピュータというと大規模システムで、設備費やメンテナンスのために巨額の費用がかかるのが普通であった。(特に、コンピュータ・情報処理の専門がシステムを設計するとシステムは大型・高価なものになりがちのように思われる。)しかしながら、このような大規模システムが、今後もはたして必要なのであろうか。現状では、ノートブック・パソコンの値段も急激に低下しており、十分な能力のあるものが、ソフトも含めて10万円程度で購入可能である。20年以上前になるが、筆者が学生だったころ購入した関数電卓が当時の価格で数万円したことを考えると十分学生に個人的に購入させることの可能なレベルであろう。インターネットへの接続もPHS等電波を使った方法ならば巨額の設備投資なしに行うことが可能である。(将来的には、学生がノートブック・パソコンを購入することを前提とすれば、コンピュータ・システムを大幅に簡素化にすることができ、学費・設備費を減らすことも可能であろう。)また、教員のパソコンの画面を投影するプロジェクターも性能の向上、低価格化が進んでおり、特別な設備のない、通常の教室においてもパソコン演習が可能な状態となっている。

4. まとめ

これまで述べたように、ニーズの面からも、パソコン等の入手のしやすさ等の面からも統計教育においてパソコンを使った演習の重要性は高まっており、統計学教育に携わる教員はこれらの要望に答える必要があると考えるのがいかがであろうか。また、これまでは、このような教育は教員個人の努力に依存していたが、今後は組織的なサポート体制を確立することも必要であろう。以上、統計教育におけるパソコン演習について、私見を述べさせていただいたが、これが、会員諸氏が統計教育を考える上での一助になれば幸いである。

4 海外研修記

本田 敏雄 (筑波大学社会科学系)

私は2000年7月より約1年間、カリフォルニア大学バークレー校統計学部に、文部科学省在外研究員として滞在いたしました。

バークレーはサンフランシスコ湾の東岸にある学園都市で、BARTという鉄道でサンフランシスコと結ばれています。気候は、夏は涼しく雨がまったく降らず、冬は暖かく雨が多い、といったところです。また滞在中の全国的な話題としては、大統領選挙、カリフォルニアの電力危機、地元の話題としては、住宅難、予想される大地震への対策(建物の補強、建て替え等)、サンフランシスコ国際空港(SFO)の発着便の遅れ、BARTのSFOへの延長に引き続くサンノゼへの延長の是非、狂暴な飼犬による被害、IT不況などがありました。あくまで私見ですが、一人暮らしの場合の住宅難は、東京より深刻だと思います。

サンフランシスコはいうまでもなく、バークレー周辺にも日系のスーパーマーケットがあります。バークレーのあるサンフランシスコベイエリアは、地域全体として都市化が進み、アメリカにしては珍しく公共交通機関が整備され、日本人には大変暮らしやすい地域です。しかしながら、カリフォルニアではマイノリティーの合計が人口の半数を超えていますが、日系人社会は相対的に縮小しているそうです。

統計学部のセミナーで、毎週定期的に行われているのはNeymanセミナーです。講演者は、統計学や確率論の専門家よりはむしろ、周辺分野の人が多かったように思います。ただ5月には、学位を取得する大学院生の講演もありました。それ以外に、統計学、確率論のセミナーもありました。春学期には、公開のjob interviewのセミナーもいくつか行われました。

私にとって目新しかった研究に関する話題は、BoostingとSupport Vector Machine (SVM)で、どちらも学習理論からの話題です。私が出席したJordan教授とBin Yu教授の授業でも取り上げられていました。Jordan教授はComputer Scienceとの併任です。

Boostingの参考文献としては、Friedman et al., A.S. (2000), pp.337-407, SVMについては、Vapnik, The Nature of Statistical Learning Theory, Springerを挙げておきます。またバークレーのBreiman教授は、Baggingという手法を提案されています。

SVMはVapnik博士によるものですが、Vapnik博士は、Empirical Processの理論には欠かせない、VC次元の提案者でもあります。学習理論との関わりが、今後の統計学の重要なテーマなのは間違いありませんが、SVMが統計学におけるVC次元のような存在になるか否かは、興味のあるところです。それは、Boostingにしても同様ですが、これまでの統計学の枠組みで、如何にその有効性が示せるかにかかっているでしょう。あるいは、統計学の枠組みの方が変わってしまうでしょうか。

バークレー校の統計学部には、教官以外にも、大学院生や客員研究員も多く、また夏には各地から研究者が訪れます。研究者間の交流が、活力を生み出すのだな、と感じました。しかしながら、私は初めての海外生活ということもあり、英語も下手で多くの機会を逃したようで、大変残念に思っています。アメリカでは主に、ニュース専門のラジオを聞いて英語の勉強をしましたが、日本でも、原稿がウェブから取れる24時間放送のラジオ英語ニュースがあれば、と思いました。

5 韓国統計学会30周年記念大会に出席して

杉山 高一（中央大学理工学部）

11月8日午後4時に仁川国際空港につき、ソウル市のホテルについたのは家を出てから8時間後の午後6時であった。飛行機に乗っている時間は2時間30分だが、近くて遠い国と私に感じさせるのは、8時間というこの所要時間である。網膜裂孔を経験し、医者から重い荷物をもたない方が良いとの指示もあって、大学4年生の愚息・高明を荷物持ちとして同行させた。大学院の試験も終わり、電子工学の専門も決まり、旅行でもしたい気分の時期であつたらしく、3泊4日の旅についてきてくれた。

翌11月10日、韓国統計学会30周年大会に出席のため、延世大学を訪れた。会場で私と学会との連絡役してくれたソウル大学統計学科の趙教授に逢い、会長の安教授に挨拶し、延世大学名誉教授尹起重教授と話をした。尹先生は一橋大学へ2年程研究留学されたことがあり、日本語のよくできる先生で、College of Business Schoolの学部長をされた風格のある方でした。65歳で退官後も、70歳までは教えることが可で、現在も統計学を教えているとのことでした。尹先生に学部長室に案内されて、学部長の具成烈教授に挨拶し、しばらくの間歓談した。学長からの指名で学部長になられたとのこと、選挙で選ぶ日本の大学との違いを感じた。米国でPh.D.を取り、専門はlabor populationである。私が韓国でお会いした60歳以下の教授は米国でPh.D.を取得された方が多かった。その前の世代は尹先生のように日本への留学も多かったのかもしれないが、現在は日本をこえて米国への留学が多いようである。

韓国統計学会大会は1時から始まり、延世大学の金雨植学長の祝辞があり、日本統計学会を代表して私が次頁のような挨拶を行った。

1日目は総会の行われた大講堂で、講演や討議が6時ごろまで続いた。懇親会はキャンパスの中にあるレストランやパーティー会場、また宿泊設

備の整った美しい建物で行われた。そこで新しく会長に選ばれたソウル大学のWoo-chul Kim教授を紹介された。5分程の会話であつたが、1967年に私のいたインディアナ州のPurdue大学でPh.D.を取ったこと、良く知っているShanti S.Gupta教授の弟子であること、やはりGupta先生のところでPh.D.をとった私の台湾の親友黄文壽教授とたいへん親しいこと等を知った。新会長も誠実で、人柄の良さそうな方で、気楽にお付き合いいただけるように感じた。

土曜日は朝早く高明と2人で延世大学へ向かった。地下鉄の新村駅を出て、タクシーをまっていたら、上品で賢そうな女子学生が立っていた。延世大学の学生さんということで、タクシーをつかまえていただき同行した。孫Minseonさんという美しい英語を話す学生で、しばらくして日本語も話すことを知った。勉強したのは7ヶ月だけのことであつたが、良く話せるのに感心した。統計学会の行われている学部のBusiness学科の大学院生で、紅葉の美しいキャンパスを3人で、日本語で話しながら、一番奥の高台にある会場まで歩いた。会場では研究発表がいくつかの教室で平行して行われていた。安会長は昨日よりも時間にゆとりがあり、両国の統計学会がお互いにどのような事柄で協力し合えるかについて具体的な話をした。

- 1) 韓国統計学会は自分達のルートを使って日本統計学会（英文誌）40～50冊ほどを販売することができる。日本統計学会はそのようなルートをもっていないので、会員の所属している大学の図書館で、韓国の統計学会誌（英文誌）を購読して下さるように努める。
- 2) 日本統計学会大会のときに、半日の日程で韓国セッションを設ける。この企画は韓国統計学会のしかるべき方をお願いしたい。

韓国での大会のときに同様のことを考える。講演者等の旅費は、それぞれが工面して参加する（どちらの学会も支給しない）。ただし、会員外の方が参加した場合の参加費1万円は免除の方向で検討する。韓国でも同様の検討をお願いした。

日本統計学会国際関係担当理事の竹村彰通教授が2月頃訪問するとのことで、竹村先生に具体的に詳しくつめていただきたいとお願いしました。上記(1)、(2)は先々は台湾も含めたいこと、また各学会がそのための予算を計上したりしないことが重要であることを再確認した。I.S.I.の折に台湾のAcademia Sinica統計学研究所長Chen-Hsin Chen教授と話したが、全く同じ意見であった。交流を長く続けていくにはお互いに無理はしないことが大切である。

Ladies and Gentleman.

Congratulations for the thirtieth anniversary of the Korean Statistical Society. I am very honored to have been invited to this memorial meeting of the Korean Statistical Society, and to represent all the statisticians

in Japan.

A few months ago, your society managed 53rd I.S.I. session in Seoul. Over 2,000 Statisticians joined to the I.S.I. session in Seoul. It was most successful session so far, and in all a wonderful academic meeting. I realized that your statistical society is very active and powerful. In that time, about 200 Japanese statisticians visited Seoul. We were all very impressed by the well organized I.S.I. session, and the hospitality and kindness of the Korean people. The session itself was extremely luxurious and productive.

From next year's annual meeting of the Japan statistical Society, we asked the Korean Statistical Society to organize the Korean session. Also we are discussing the possibility of purchasing each other's English journals economically. I sincerely wish that we cooperate with each other to develop both societies, then we may have a bright future ahead of us.

Finally, thank you all very much and again, congratulations on your thirtieth anniversary.

6 科学研究費「統計科学」について

竹村 彰通 (東京大学)

統計学会員の方々が科学研究費に応募する際、「経済統計学」あるいは「数学一般(含確率論・統計数学)」とならんで、複合領域「統計科学」に申請される場合が多いのではないのでしょうか。「統計科学」は赤池弘次先生をはじめとした先人の努力により、複合領域の中で独立した「分科」としてたてられ、統計科学の独自の存在意義を示す意味がありました。

ところで、吉村先生の日本学術会議報告にもあるように、来年度から科学研究費の分科細目表が変更され、「統計科学」は独立した分科ではなく、情報学の下細目となる情勢にあります。ここでいう情報学は狭い意味の情報科学ではなく文理融合を視野に入れた広い意味の情報学ではありません

が、それにしても分科細目表で分科から細目への「格下げ」は統計科学としては残念なことであると言わざるを得ません。現在の科学技術の発展の中で「情報」が一つの中心概念であることは事実であり、統計科学もデータという情報を扱う科学であるわけですが、統計科学の応用は社会科学や生物科学等にも広がりを持つものであり、情報学の一部としてとらえきれものではないと考えられます。

しかしながら、以上のような議論は統計学会員にとっては当然のものではあるものの、統計科学の外部から見た場合には必ずしも説得性を持つものではないと思われます。一つには、統計学自体が確立した理論的枠組みにとらわれすぎていて新

しいニーズに積極的に対応しきれていないという面もあると思われます。

実は科学研究費の分科細目表の変更に関しては、もっと直接的に統計科学への応募数が非常に少なかったという事実が重要です。統計科学はこれまで分科でありながら、他の多くの細目と比較しても応募件数が少ないという状況にありました。これでは統計科学の重要性を言葉で主張しても説得力がありません。大学や研究のあり方について今後ますます形式的な評価が適用されて行く中で、応募件数のような客観的な数字で実績をあげていくことも重要です。

また今回の変更に関して細目を規定するキーワードの問題があります。現状の変更案では統計科学に関連するキーワードには統計学の伝統的なキーワードが並んでいるのにたいして、新しめのキーワードが他の細目に含まれているという問題があります。統計学で長く研究されて来た方法論が他の分野で新しい名前前で研究され始めた場合、そのことだけで新しそうに見えてしまう場合もあります。

統計科学は隣接する諸分野との競争的な状況に有効に対処して来たとはいいいくいのではないでしょうか。組織的にも統計学界は小さな学会が乱

立しており、今回の問題に関しても迅速な対応ができない現状です。小さな単位に固執して独自性を守るだけでは大きな発展は望めないと考えます。今回の事態を一つのきっかけとして、統計学界のあり方自体を再検討すべき時期に来ていると考えます。

なお以上に関して数字、キーワードなどの具体的な情報は、インターネットで見ることができます。まず日本学術振興会の科学研究費のホームページ

<http://www.jsps.ab.psiweb.com/j-kaken.html>

にアクセスしてください。特にその中の「科学研究費補助金「系・部・分科・細目表」の改正について」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/010703.htm

をご覧ください。このページの中にキーワード各細目のキーワード一覧へのリンクもありますのでぜひご覧ください。また細目別申請状況については「平成13年度細目別新規課題申請受付状況（6月21日）」

<http://www.jsps.ab.psiweb.com/kensu1.htm>

をご覧ください。

7 会則改正について

学会組織特別委員会委員長 矢島 美寛

No.109会報でお知らせしましたように9月4日より新会則が施行されました。細則3条に規定されております会費の年額に挿入する但し書きの文案についてお諮りしましたが、締め切り日の11月10日（土）までに会員の皆様からは異論がありませんでした。

したがって9月1日開催の評議員会において承認されました文案どおりに但し書きが決定されたことをご報告いたします。但し書きは既にお配りいたしました新名簿に記載されておりますので、ご覧ください。

8 第70回大会のお知らせ

8.1 第70回大会のお知らせ

来年度の日本統計学会第70回大会は以下の要領で開催の予定です。

日程は今年度とほぼ同時期です。

会場：明星大学大学会館

場所：日野市程久保2-1-1

期間：2002年9月7日（土）～9月10日（火）
の4日間、ただしチュートリアルセミナーの日程など詳細は未定です。

8.2 第70回大会へのお誘い

渉外担当理事

広津千尋，国友直人，竹村彰通

第70回大会は昨年に引き続き9月初頭の開催となります。

会場となる明星大学日野校舎は、新宿から西に30kmくらいの所に位置していますが、新宿から京王線特急または準特急で高幡不動駅まで30分、そこから多摩市モノレール3駅で中央大学・明星大学駅に着きます。そこはもう明星大学の一つの入口になっており、最初につかる建物が明星大学学生会館です。なお、モノレールは京王相模原線・小田急多摩線の多摩センター駅を南端とし、北上して、京王線と高幡不動駅、JR中央線と立川駅、西武拝島線とは玉川上水駅で接続しています。

さて、第70回大会の最大の特徴は、それが応用統計学会および日本計量生物学会との連合大会として行われ、他に日本分類学会が同時期開催されることです。そのこと自体が幅広い話題に触れられる良い機会であることを意味しますが、さらに大会企画と運営のための連絡委員会が特別に組織され、市民講座の開催を計画するなど大会をより一層充実させる努力がなされています。本大会はこの会報でいろいろな角度から議論されている統計学の将来にとっても重要な大会となりますので、皆様の積極的な参加をお願い申し上げます。

8.3 第70回大会共通テーマについて

大会プログラム編成担当理事

岩崎 学，鎌倉稔成，田中勝人

共通テーマにつきましては、現在のところ、下記の8テーマを予定しております。各テーマの詳細につきましては、それぞれのオーガナイザーに

お問い合わせください。

なお、会員からの要望にも配慮したいと思しますので、新たなテーマやご意見などがありましたら、事務局宛お寄せください。

今年の大会は、応用統計学会および日本計量生物学会との連合大会であり、共通テーマ以外にも、公開講演会、および韓国や台湾などのアジア近隣諸国の統計学者との共同セッションなど、多くの企画を検討しています。決まり次第、会報や統計学会のホームページでお知らせいたします。共通テーマをはじめ、これらのセッションに多くの会員が参加していただきたいと思えます。

●官庁統計利用の現状と課題

オーガナイザー：福重元嗣（神戸大学大学院経済学研究科）

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町2-1

Tel & Fax：078-803-6833

E-mail：mfuku@kobe-u.ac.jp

統計学会では、この数年間、官庁統計に関してセッションを設け、この問題について様々な研究や問題提起を行ってきました。これと並行して、多くの研究者によるマイクロ統計に関する研究成果も徐々に蓄積されつつあるのが現状であると思われます。しかしながら、官庁統計の本格的な利用が始まったとって良いほど官庁統計は身近なものになったのでしょうか？

このセッションでは、研究者が官庁統計の利用に当たって問題となる点や、さらに有効に利用するための方法論など、幅広く官庁統計利用に関連して論文を募集したいと思います。特に官庁統計の個票を利用したことによって始めて発見された問題点といった利用者にとって有益な情報を提供する研究等について議論がなされることを期待します。もちろん、官庁統計の調査方法や制度的問題、個票開示に関する理論的研究といった官庁統計そのものの抱える論点から、官庁統計の利用に当たって制限された開示方法に対応した統計的な解析方法などの多方面の研究発表を歓迎いたします。

●Computer-intensive methods

オーガナイザー：岩崎 学（成蹊大学工学部）

〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

TEL：0422-37-3764，FAX：0422-37-3871

E-mail：iwasaki@is.seikei.ac.jp

先日あるセミナーで「最近のPCは10年前のスーパーコンピュータ並みの能力を備えている」という話を聞きました。我々は既にこのようなツールを日常的に使える環境にある訳です。そして、統計手法も計算環境の発展と共に進化し続けます。近年では特に、正規分布等のパラメトリックモデルに基づく理論的にきれいな手法ではなく、多様な実際データに対応できるフレキシブルな手法が注目を集めています。

本共通テーマセッションでは、コンピュータと深く関わった新しい手法や、アルゴリズムの提案、これまでの手法の性能評価、種々の分野への応用といった講演を募集します。Bootstrap, MCMCのようなシミュレーションを用いた手法、平滑化を含むノンパラメトリックな手法、正確な確率計算に基づく解析、あるいは欠測などの不完全データの扱いなど、幅広い話題につき現代的な視点から議論したいと考えています。

●極値統計学とその応用

オーガナイザー：竹内恵行（大阪大学大学院経済学研究科）

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-7

TEL：06-6850-5226，FAX：06-6850-5274

E-mail：takeuchi@econ.osaka-u.ac.jp

母集団分布の裾を主な推論の対象とした「極値統計学」は、以前より水文学、建築工学、信頼性工学や保険数学など、最大値や最小値、稀発生を扱う分野で研究されてきました。最近では、金融工学などの展開により、気象デリバティブなどの金融商品の開発にも使われるなど、様々なリスクを予測・評価する手法として注目されています。（会報No.102に高橋倫也先生の紹介記事があります。）

本共通テーマセッションでは、リスク評価手法

としての「極値統計学」に関する理論的な話題や、様々な応用分野での解析例などの幅広い研究発表を歓迎します。

●ウェーブレットと統計解析

オーガナイザー：田中勝人（一橋大学大学院経済学研究科）

〒186-8601 国立市中2-1

TEL & FAX：042-580-8789

E-mail：tanaka@stat.hit-u.ac.jp

本テーマは、今年の統計学会におけるチュートリアルセミナーのテーマとして扱われたものです。ウェーブレットの方法が統計学の分野で使われ始めたのは10年ほど前です。それは、データの変動を時間と周波数（スケール）という2つの観点から、同時に、かつ局所的にとらえる方法として、従来の時間領域のみの分析、あるいはフーリエ変換による周波数領域のみの分析を超える、あるいは補完するものとして使われています。

統計学に関連した応用としては、確率密度、回帰関数、スペクトラムなどのノンパラメトリック推定、信号の推定、スムージング、変化点の検出、長期記憶モデルの推定などがあります。本セッションでは、これらの応用はもちろん、理論的な側面の研究やウェーブレット解析の問題点など、多様な報告を募り、情報交換の場にしたいと思います。

●遺伝統計学

オーガナイザー：渡邊裕之（萬有製薬株式会社臨床医薬研究所）

〒103-0026 東京都中央区日本橋兜町5-1

TEL：03-5641-6130，FAX：03-5641-6658

E-mail：watnbehi@banyu.co.jp

遺伝子の研究においてはヒトゲノムの塩基配列の解析がほぼ終了し、本格的な機能解析が始まりつつあります。その際、配列と形質（各個人が示す種々の属性）との対応をつけること（形質マッピング）が最も重要であり、薬剤の効果的な研究開発やテーラーメイド医療を行う際の有用な情報

になると思われます。遺伝統計学の手法としては、パラメトリック連鎖解析、ノンパラメトリック連鎖解析、連鎖不均衡解析やTDT (transmission disequilibrium test) などが提案されており、これらに対応するソフトウェアも提供されてきています。そして、遺伝子の研究におけるデザインの設定や解析においては、統計学の知識が不可欠であり、統計家の参与および活躍が期待されています。

本共通テーマセッションでは、遺伝統計に関する試験のデザイン、解析方法などの理論や応用事例など幅広い話題について、研究発表、事例発表を募集します。また、ヒト以外の遺伝子の研究も歓迎します。

●実験計画法とその応用

オーガナイザー：百武弘登 (九州大学数理学研究院)

〒810-8560 福岡市中央区六本松4-2-1

TEL & FAX : 092-726-4786

E-mail : hyakutak@math.kyushu-u.ac.jp

実験計画法は、分散分析、組合せ論に関連した話題から、繰り返し測定データにおいて線形なブロック効果だけでなく非線形なブロック効果を考慮した非線形モデルの解析や、多重比較や最良母集団の選択問題において、最適な標本数の配置およびこれを発展させた逐次法や二段階法などに関する話題まで、広く解釈することができます。これらの話題に関連した講演を、理論、データ解析を問わず歓迎します。

●空間データの解析

オーガナイザー：鎌倉稔成 (中央大学理工学部)

〒113-8551 東京都文京区春日1-13-27

TEL : 03-3817-1934, FAX : 03-3817-1943

E-mail : kamakura@indsys.chuo-u.ac.jp

人間は空間上に生活しているので、何らかの情報を必要とするとき、その情報は空間的な位置情報を伴うことが多く見受けられます。たとえば、気象予測について考えれば、海面気圧、蒸気圧、気温、湿度のようなデータは空間的な位置との組み合わせにおいて重要な意味を持ってきます。また、ある病気の疾病率の調査では、地域的な疾病率の差が問題になります。マーケティングの分野では、どの地域にどのような商品の購買層があるかということが関心の対象となります。鉱物、生物資源の調査では、鉱物の埋蔵量、生物の生息数を推定することが課題となりますが、いずれも、ある一定領域の平均的な数の推定だけでなく、空間的な変動を見ることも重要な問題です。これら様々な分野にわたり応用範囲の応用を含むテーマについて、空間データという見地から広く講演を募集します。

●漸近分布論の現代的意味

オーガナイザー：吉田朋広 (東京大学大学院数理学研究科)

〒153-8914 東京都目黒区駒場3-8-1

TEL & Fax : 03-5465-8335

E-mail : nakahiro@ms.u-tokyo.ac.jp

計算機の能力の向上によってシミュレーションが容易になるとともに、漸近分布論の分布近似法としての存在意義が問われています。このような状況を踏まえて、本セッションでは、例えば、統計現象の漸近論による定性的な理解、モンテカルロ法より効率のよい解析的方法、確率数値解析における誤差評価など、漸近分布論の現代的意味を示唆する話題を扱いたいと思います。ただし、トピックは特に限定しません。また、漸近論に肯定的である必要もありません。批判的な観点からの発表も大いに結構ですが、計算機に何らかの意味で関わる発表を歓迎します。

9 統計教育委員会報告

統計教育委員会委員長 村上 征勝（統計数理研究所）

統計教育委員会では、学校や企業での統計教育のあり方等を検討するため、1～2ヶ月に1回の頻度で委員会を開催しております。委員会は通常土曜日の午後に統計数理研究所で開催しており、この委員会には統計学会の会員の方ならどなたでも参加できます。参加ご希望の方は下記までご連絡ください。

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所 村上 征勝

Tel & Fax : 03-5421-8766

E-mail : murakami@ism.ac.jp

なお、現在の委員会は以下のような方々で構成されています。

新家健精、飯田博和、伊藤孝一、景山三平、片岡正昭、栗原考次、島田俊郎、杉山高一、瀬尾隆、中條安芸子、二宮智子、砂浜敬郎、程野眞、丸山久美子、三浦由己、三宅章彦、村上征勝、矢野一幸、渡辺美智子、伊藤彰彦、上田尚一、水谷弘、

水野坦、宇喜多義昌、小野英夫、濱田宗雄、松下嘉米男、美添泰人、村上正康、宿久洋、芳沢光雄
10月以降2回の委員会を開催いたしました。

第7回委員会 平成13年11月17日（土）13：30～
15：30 出席者17名

1 講演「情報教育としての統計教育」

玉川大学 二宮智子

2 委員会の活動について

第8回委員会 平成13年12月22日（土）13：30～
15：30 出席者16名

1 講演「社会人大学における統計教育」

筑波大学 椿広計

2 委員会の活動について

また上記の会合の他に、小中高校における統計教育を考えるワーキンググループの会合を3回開催いたしました。

10 研究部会活動最終報告

10.1 「環境データの解析」活動報告書

主査：清水邦夫（慶應義塾大学理工学部数理科学科）

期間：1999年11月発足、2001年11月終了

活動の内容：

本研究部会は、人工衛星からの地球環境データや地上、地中、海洋等で得られる環境データの解析を主題として1999年11月に発足しました。研究部会の意図するところと経過報告につきましては、会報No.107/2001.3.10号に掲載されています。ここでは2年間にわたっての部会の活動について総括をしたいと思います。

研究部会は、原則として研究部会メンバーを含む高々数名のグループ毎に研究を進めることとし

ました。各グループは、降雨強度の推定とその環境との関わり、東京湾の水質測定データの収集・スクリーニング・モデル化、環境中ダイオキシン類測定データの収集・モデル化、光学センサ（主にランドサットTM）に含まれる幾何的な歪みと放射量歪みの物理的な原則に基づいた実用的補正方法の検討、クリギング手法の環境データへの応用、土地被覆分類法の研究など、グループ毎に固有なテーマで研究を行いました。しかし、グループ間の連絡は密にし、互いの研究成果を持ちより意見交換をする機会を設定し、それに基づいてさらに研究を続行するという方法が取られました。研究成果の何件かは、日本統計学会年会および科研費研究会「環境統計データ解析の研究」（慶

應義塾大学理工学部 [2000年11月21日, 22日], 統計数理研究所 [2001年10月1日, 2日]) において発表されました。また, 研究成果の論文等による発表は, 口頭発表からはタイムラグがあり, 今後順次になされる予定です。

学会や研究集会での発表と論文等準備状況につきましては部会員は着実に成果をあげたと判断できるように思いますが, 部会の役割に関して反省点がないとは言えません。最も大きな点は, 環境データに係る統計学研究者の確保不足と本分野のアピール不足です。

この2年間で, 本分野への新たな統計学研究者の取りこみと必ずしも統計学会員とは限らないけれども環境データに興味を持つ研究者との新たな研究の開始は, 全くゼロとは言わないまでも, 極めて困難であったと言わなければなりません。このことは本分野に限られることではないかも知れませんが, 研究の広報活動とともに若手研究者の育成とデータを生産する立場の研究者との積極的な共同研究の推進が望まれるところであると思われます。

10.2 「データマイニングにおける統計的手法と実際」活動報告書

主査: 鎌倉 稔成 (中央大学理工学部)

期間: 1999年11月発足, 2001年11月終了

活動の概要: コンピュータの高速化と, データの蓄積技術の進歩および蓄積のためのデバイスの大容量化に伴い, データ量は急速に肥大化してきた。これまでのデータ処理のための伝統的な統計手法では, あまり大量ではないが, 精度の高い, 確率モデルの構築しやすいものを対象としてきた。し

かしながら, 近年は, 目的が必ずしも明確ではなく, データを蓄積し, 後になって目的に応じてそのデータから情報を抽出するという方法がとられている。

データの技術や情報の抽出方法については, 各分野で研究が行われ, また, 議論がなされている。精緻な実験計画に基づくデータ収集が行われないにしろ, これらデータを複合的に扱うデータマイニングの手法を統計的立場に立って吟味してみる必要がある。

本研究部会では, 前年度に引き続きデータマイニングに関心を持つ者, および現在データマイニングを研究に従事している研究者が研究発表を行い, お互いに意見交換をするという形で薦めた。第1年度はOR分野との積極的交流を持ったが, 第2年度は統計分野の独自性を高めるためにあまりそうした意識をせずに, 会員からの積極的な研究の成果発表を目標とした。

本年度は定常の研究会の他に本研究会の主催するシンポジウムを2回行い, 会員相互の意見交換を行った。発表件数は20件を越えた。また, 海外との研究交流も積極的に行い, シンポジウムの発表のうち, 2件は韓国からの研究発表であった。

また, 本年度は隔年で開催されるISIの開催年であり, 研究部会の会員の積極的な参加とおよび成果発表が行われた。さらに, ISIのサテライトミーティングとして行われた, International Symposium on Business and Industrial Statistics (ISIS2) では, 本研究代表者が中心となって Massive Data and Data Miningのセッションをオーガナイズし, 国際的な研究交流をするとともに, 会員の成果発表を行うことができた。

11 理事会報告

2000・2001年度第5回理事会議事録

日時: 2001年10月27日 (土曜日) 12:00~15:30

場所: 統計数理研究所特別会議室

出席者: 会長: 杉山高一 理事長: 小西貞則

理事: 北川源四郎, 矢島美寛, 岩崎学, 田中勝人,

瀬尾隆, 中野純司, 国友直人, 竹村彰通, 広津千尋, 土屋隆裕, 藤澤洋徳

<議題1>各理事からの報告

[会誌編集] 北川担当理事より, 欧文誌第31巻第

2号は既にゲラが作成され作業は順調に進展しており、また、論文投稿数も順調である、との報告がなされた。

矢島担当理事より、和文誌第31巻第3号は既に原稿を出版社に送付し年内には発行予定である、との報告がなされ、加えて、論文投稿数や審査状況の説明がなされた。

その後、学会誌、特に和文誌の今後について議論が行われた。

〔大会企画〕田中担当理事より、プログラム編集委員会は共通テーマ・チュートリアル・市民講座などについて議論を始めていて、また、報告題目の関連分野としての統計一般理論と多変量解析は報告数が多いので細分化を検討している、との報告がなされた。

〔広報〕瀬尾担当理事より、会報第109号は印刷中で今月中には発送予定であり、会報第110号の内容に関する案が提示され例年通りの1月10日発行を目指している、との報告がなされた。

〔情報〕中野担当理事より、以前から議論されていた会員全体のメイリングリスト作成を移行に移したい、との意見が具体的な規定案とともに提案され、了承された。

〔涉外〕竹村担当理事より、今回の大会において、韓国からのオーガナイザーによる特別セッションを打診中で、旅費などの資金援助はなしで参加費は取らない方向で検討している、との報告がなされ、その逆も検討中であることが報告された。

国友担当理事より、次々回の大会は名古屋地区を中心として交渉したいとの提案がなされ、了承された。

〔庶務会計〕土屋担当理事より、新しく発行される会員名簿は、11月1日現在の所属等を基本とする予定で、新たに歴代の小川賞受賞者が掲載され、改定された会則や投稿規程も反映される、との報告がなされた。加えて、会員名簿の共通化に関しては議論の最中である、との報告もなされた。

<議題2>SciPress社とのコピーライトの共有について

小西理事長より、SciPress社の方から、今後インターネット上で日本統計学会欧文誌を公開するにあたりコピーライトを日本統計学会と共有したい、との申し出がなされている、との報告がなされた。議論の結果、将来的なことも鑑みて、コピーライトをSciPress社と共有化はしないが、SciPress社のホームページ上での日本統計学会欧文誌の公開の自由を認めることを確認した。

<議題3>電子図書館サービスにおける学会誌の無料閲覧化について

北川理事より、情報学研究所で行われている電子図書館サービスにおける日本統計学会誌の閲覧は現在は有料であるが、より広く見てもらうためにも無料化してはどうか、との提案がなされた。議論の結果、無料化の方向で進めることになった。

<議題4>韓国統計学会会員への日本統計学会欧文誌の有料頒布について

杉山会長より、韓国統計学会から、韓国統計学会会員に日本統計学会欧文誌を2000円程度で購入させて欲しいという希望が伝えられている、との報告がなされた。議論の結果、韓国統計学会会員には韓国統計学会を通して、その金額での購入を認める、との結論が出された。同時に、韓国統計学会欧文誌を日本統計学会会員も同程度の金額で購入可能になるであろうことが、杉山会長より報告された。

<議題5>2002年合同年次大会について

広津理事より、来年度の合同年次大会に関する実行委員会が10月9日に既に開催されたことが報告され、準備状況について説明がなされた。同時に、連絡委員会から日本統計学会の新しい庶務会計担当理事にも実行委員会委員への就任が要請されている旨が報告され、了承された。

田中理事より、市民講座に関連した説明が行われ、日程や講演内容に関する議論が行われた。

<議題6> 科学研究費補助金の分科「統計科学」 に対する申請件数について

竹村理事より、科学研究費補助金の分科「統計科学」に対する申請件数が非常に少なく、分科

「情報学」における細目に含まれる予定であることが指摘された。このことに対して、申請件数を増やすためにはどうすればよいか、という議論が行われた。

12 日本学術会議報告

2001年10月18日

第4部会員統計学研究連絡委員会担当 吉村 功

はじめに

学術会議では、総会が年に2回開かれます。その際に、部会、連合部会、特別委員会などの会合も開かれます。今年度のその2回目が10月15日から18日にかけて開かれました。一般的なことは、学術会議のホームページに逐次掲載されていますので、興味のある方はそれを覗いて下さい。ここでは特に統計学関連学会の会員の皆さんに特にお伝えの方がよいと感じたものを、統計学研究連絡委員会の活動も絡めて、報告しておきます。

1. 知的所有権

データベースの作成にたいして、どの程度の保護と自由使用を認めるかが、国際的な議論となっています。報告によりますと、1990年頃からの検討をへて、欧州連合（EU）が、データベース作成の投資者保護のために「独自の権利（*sui generis right*, スーアイ・ジェネリス・ライトと発音するラテン語だそうです。）」を与える制度を導入するという政策判断をしました。独自の権利というのは、著作権よりゆるい条件、つまり、著作権ではそのデータベースに創作性があつたときのみ権利が保護されるのになら、創作性がなくても著作権並みの保護を与えようということです。たとえば、ごく平凡な索引・検索のデータベースなどを公的資金で作ったときがこれに該当します。

これについて学術会議は、「データベースに関して提案されている独自の権利（*sui generis right*）についての見解」という声明を採択しました。このような権利は、学術研究におけるデータベース

の自由な利用を脅かすものであるから反対である、ということです。投資に対する保護はいままで通り、著作権の範囲で行える、という主張です。

データベースについては制作者と利用者の両面を持っている統計家にとって、データベースがどの程度商品化されるべきか、大きな問題だと思います。現実の法制度を間違いなく確かめた上で、ルールをどのように定めるか議論して下さい。

2. 日本の計画

日本が国際的に21世紀の学術をリードするには、日本の計画（英語では「Japan perspective」でありながら、日本語の表題は「日本の計画」）を、世界に発信すべきである、ということで精力的な作文が進められています。

ヒューマンセキュリティの再構築、循環型社会、価値観の転換とライフスタイル、ジェンダー問題の多角的検討、生命科学の全体像と生命倫理、情報技術と経済・社会、教育体系の再構築、という7課題が焦点になっています。

1年後には大きな文書が採択されるでしょう。いずれも難しい問題であり、1年のパートタイム的作業で解決の方向が出るとは思えませんが、日本をリードしている方々がどのように考えているか、ということは表面化すると思います。乞うご期待。

3. 科研費の分科・細目・キーワード

平成15年度（来年秋の申請）の科研費補助金の分類が大幅に変わりそうです。科研費は、「系、

部、分科、細目」という枝葉構造で整理されていますが、系を、「総合・新領域系」「人文社会系」「理工系」「生物系」に分け、今まで「複合領域」の分科だった「統計科学」が、「総合・新領域系」の分科「情報学」の一つの細目にりそうです。「経済統計学」は人文社会系の第3部、「数学一般」は理工系の第4部です。）なりそうです、という言い方をするのは、イニシヤチブが文部科学省にあって、学術会議は意見を自発的に述べるという立場にしかないためです。

これについて統計学研連は、メールを通して議論をしました。統計学研連は、学術会議会員7人と、統計学関連学会からの委員7人とからなっ

ています。後者の皆さんは、「統計科学」を今までどおり「分科」として残すべきで、情報学の一部に組み込むということに反対、という主張をしていますが、前者の皆さんはこれに肯定的ではありません。現段階で、独立した分科を要求するにはそれだけの説得性のある理由が必要ですが、実際の「統計科学」の申請件数、そこで達成された成果が、説得性を持つだけの内容になっていないからです。「統計科学」の学問としての威力がそれほどでないことの反映ではないでしょうか。この点については、枠内に安住する統計科学ではなく、他分野から一目おかれる「統計科学」を目指していただきたいと思います。

13 会合案内

■会合案内

2002年1月

*1.31-2.1: Modeling Seasonality and Periodicity (FTSM3)

主催: 統計数理研究所

会場: SGIホール (東京, 恵比寿ガーデンプレイス)

<http://www.ism.ac.jp/~kawasaki/ftsm3/index.htm>

問合せ: 川崎能典 (統計数理研)

E-mail: kawasaki@ism.ac.jp

2002年8月

*8.5-7: The 3rd International Conference on Multiple Comparisons (MCP2002)

<http://www.ba.ttu.edu/isqs/westfall/mcp2002.htm>

*8.24-28: XV. Compustat conference of the International Association for Statistical Computing (Compstat2002)

<http://www.compstat2002.de/>

2002年9月

*9.9-13: IEA (International Economic Association) 13th World Congress

<http://www.ica-world.org/>

14 事務局から

投稿のお願いとお知らせ

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて1,000字以内をめぐりに原稿をお送りください。

来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内(教官公募)なども受け付けております。また、修士論文・博士論文の紹介を行います。(1) 氏名、(2) 学位名、(3) 取得

大学名、(4) 論文タイトル、(5) 主査名(指導教員)、(6) 連絡先(e-mailアドレス)をお送り下さい。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル(テキスト形式)の送付をお願い致します。

原稿送付先

〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3

東京理科大学理学部応用数学科 瀬尾隆宛

Tel : 03-5228-8199 (直通)

Fax : 03-3290-4293 (事務室)

E-mail : kaiho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

訃報

次の方々が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

谷重 雄会員 (2001年12月7日)

平川孝三郎会員 (2001年12月31日)

退会者

直井 澄, 船渡川隆, 谷口淳介, 太田 晃, 野村啓介, 佐藤靖子, 韓慶軍, 宮武 修, 村山昇作, 渡辺和一郎, 大崎紘一, 緒方 昭, 納谷嘉信, 川口清史, 太田 晃, 藤元春海, 徳永 修

現在の会員数 (2002年1月10日現在)

名誉会員 25名

正会員 1347名

学生会員 167名

総計 1539名

賛助会員 21法人

団体会員 3団体

・日本統計学会ホームページURL :

<http://www.jss.gr.jp>

・住所変更連絡用e-mailアドレス :

jusho@jss.gr.jp

・広報連絡用e-mailアドレス :

kaiho@jss.gr.jp

・その他連絡用e-mailアドレス :

jimu@jss.gr.jp